

もくじ

あだち民具図典特集①江戸時代の日常美～和鏡… P1

あだち民具図典⑬銭升… P3 はい文化財係です⑭千住花又瀬崎辺之図… P4



写真1 松竹梅鶴亀図柄鏡  
(綾瀬 吉田氏寄贈)



写真2 家紋入り柄鏡  
(神明 星野氏寄贈)

# 足立史談

第648号

2022年2月15日  
足立区立郷土博物館内  
足立史談編集局  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562

## あだち民具図典特集①

# 江戸時代の日常美～和鏡

わきょう



喜多川歌麿《手鏡の母子》  
文化期 (1804～1818)

鏡は化粧をする際に使われる道具です。古墳から大量の銅鏡が出土するように神聖な道具としても扱われていました。今でも神社の神体が鏡になっているところが各地にあります。本稿では足立区立郷土博物館が収蔵している江戸時代に使用された和鏡を紹介するとともに同時代に描かれた美術作品から鏡の使用をみていきます。

鏡の母子(写真左)には和鏡を使用している当時の女性の姿を見ることが出来ます。髪を大きく結った女性が舌を出しながら和鏡を見ています。和鏡は青銅などの金属で作られ、鏡面にはスズが張られていました。そのため曇り防止のため箱に入れて保管されていました。浮世絵の女性の顔と比較すると江戸時代の和鏡の大きさがわかります。また、女性の髪形が大きくなることで和鏡も大きくなっていました。

■館収蔵の和鏡からみる紋様 写真1は「松竹梅鶴亀図柄鏡」(直径二四cm、柄一〇・五cm)です。和鏡は婚礼道具としても用いられたことから吉祥紋が多く描かれています。写真1

の鏡には松竹梅と鶴亀があしらわれ、左側には「津田薩摩守藤原定次」という鏡師の銘があります。鶴亀や松竹梅といったデザインは江戸時代後期に多く作られるようになりました。

**写真2**は「家紋入り柄鏡」(直径一七cm、柄九cm)です。砂目地で松の絵の上に大きく「折り入り角に立葵」の家紋があしらわれ、左側には「藤原金益」の銘が書かれています。こうした家紋入りの鏡が作成された背景に踏み返し法による鏡の大量生産化があります。踏み返し法は一度完成している鏡を砂などに押し込んで型を取り、それを合わせて鑄型とするもので、いわばコピーを作るような方法です。踏み返し法で作った鏡に注文主に応じた家紋をほどこしたものが作られるようになりました。

家紋入り柄鏡は江戸時代中期に多く作られました。江戸時代後期になると大文字入り柄鏡が作られるようになります。踏み返し法で鑄型を作っていくことを重ねると紋様が徐々に不鮮明になっていきました。そのため**写真2**のように当初の紋様を背景として、大きく目立つ文字を書き加えるようになり、「相生」や「薫」などの縁起のよさや文学作品を連想させる大文字入りの柄鏡が多く作られるようになりました。

鏡は大型のものだけではなく、旅行などに持ち運べるように小型のもの

のも作られました。**写真3**(天下一藤原重□(判読不明)作、縦七・八cm、横五・五cm)は当館が所蔵している小型鏡の一つです。現代のコンパクトミラーと用途が似ています。円形の小型鏡もありますが、これは四角形に作られています。小型鏡には裏面に紋様があしらわれたものもありますが、**写真3**の小型鏡は砂目地で紙入れに縫い付けるための二つの突起と銘だけしかありません。

■**絵に描かれた鏡磨き** 現在の鏡は一般的に金属の上にガラスを張っています。しかし、和鏡は直接スズに空気が触れるので半年も経つと鏡面がくすんでしまいます。そのため、鏡を定期的には磨く必要があります。鏡を磨くにはまず酸性のザクロの果汁で鏡についた汚れを落とします。そして水銀を使って再度スズのメッキを行います。当初は鑄造から研磨まで鏡師が一貫して行っていました。室町時代以降は鏡の数が多

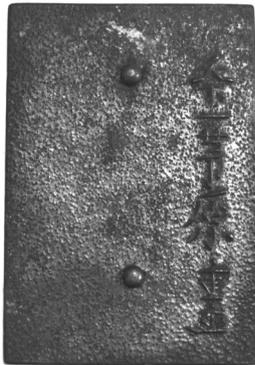


写真3 小型鏡



建部巢光《巢光俳諧絵巻》  
文化10(1813)年

時に縁起のよい文様があしらわれ鑑賞できるという美術品としての側面を持っていました。当館には他にも南天(難を転ずるという意味で好まれた)や亀甲地紋などがあしらわれた和鏡が残されています。鏡の紋様からは当時の人々の美に対する価値観、縁起担ぎに対する嗜好をうかがい知ることができます。

和鏡を所蔵していた吉田家は伊藤谷村(現・綾瀬)の豪農の家です。検地帳の写本や明治時代以降の色紙や短冊などが伝来しています。また久左衛門新田(現・神明)の星野家も村役人層を勤め、その文書は区の登録文化財になっています。博物館に寄贈された和鏡も旧家に伝来してきたものの一つです。博物館に所蔵されている和鏡は具体的な作成年代や旧家でのように使用されたのかということまではわかりません。しかし大切に保管されてきたことがうかがえます。

当館には、建部巢光が描いた鏡磨きを行っている人物の絵が残されています。建部巢光(一七六一〜一八一四)は江戸時代に関屋(足立区)に庵を構えた文人・画家です。彼は「巢光俳諧絵巻」(以下・絵巻)という俳句と俳句にちなんだ絵を描いた巻物を描きました(**写真右**)。絵巻の中に腰を屈めて鏡を磨いている男性の姿が描かれています。

■**日常道具からみる美意識** 和鏡は日常生活で使用する道具であると同

現代では使われなくなった道具であっても、当時の市井を描いた浮世絵などの美術資料と組み合わせることによって物の使用や管理の状況を視覚的に知ることができるのです。

【参考文献】

青木豊『和鏡の文化史 水鏡から魔鏡まで』刀水書房、一九九二年

(当館専門員 問所 瑛史)

足立の民具図典⑬  
 ぜにます  
**銭升**



銭升は、大量の硬貨を一度に数えるための道具で、江戸時代に両替商や商家などで使われるようになったのが最初といわれています。名前は、米や液体を量る道具である「升」から、銭を量る升であるため名づけられたものと考えられます。(写真左)



羽子板型の薄いトレーのような容器的なかに、硬貨が一枚ずつ入るよう  
 うのが前提で一般の家庭では使うことのない道具でしょう。  
 江戸時代の銭升は、小さな短冊形をした一朱銀、二朱銀を数

に細かい金具、もしくは竹ひごでマス目がつけられています。左手で持ち、硬貨をひとつかみ乗せてゆらし、軽く傾斜させながら右手でならすと、マス目のひとつひとつに一枚ずつ硬貨が入ります。余った硬貨は、そのままべり落とすと、マス目の数と同じ数の硬貨を数えて取り出すことができ、また硬貨の金額によって、いくらになるかをすぐに計算することもできます。同じ種類の硬貨をあらかじめまとめておくという手間はありますが、一枚ずつ数えるよりも早く作業を進めることができます。数多くの硬貨を扱



区役所職員が昭和三四(一九五九)年に伊勢湾台風被害地へ送る義援金を数えるために使っている様子を、足立区広報写真のなかで、見ることがで

えるため、マス目も小さく長方形です。一朱銀は、長辺一・五cm、短辺〇・八cmと小さく、一六枚で一両となります。二朱銀は、長辺二・八cm、短辺一・一cm程度で、八枚で一両となります。そのため、八×一〇(十両)、五×八(五両)などというように、額面がわかりやすいマス目で作られています。一〇×一六と大変細かいものもあります。一朱銀を量るのに便利です。銭升は江戸時代から使われ始めた道具ですが、実は昭和の中ごろまで使われていました。

銭升は、シンプルでわかりやすい道具のため、小学生の「むかしの道具しらべ」や、体験学習で紹介しています。(当館学芸員 萩原 ちとせ)

きます。女性は左手に銭升を持ち、右手で硬貨をつかもうとしています。当時の区役所の現役道具であることがわかります。(写真上)  
 当館所蔵のものには、「硬貨整理器 昭和38年10月納 ノーブル工業」と記載された金属ラベルがついています。銭ではないので、さすがに銭升とは呼んでいなかったようです。「硬貨升」(こうかます)と呼んでいたという報告もあります。同じ仕組みと使い方の方の道具であっても、時代の変化によってその名称も適したものに変わっている様子がうかがえます。

・写真上：義援金を数える区職員  
 ・写真下：被害地に送られる義援金と救援物資



十八世紀前半の足立区域の姿を伝える貴重な文化財に「千住花又瀬崎辺之図」（足立区登録有形文化財・郷土博物館所蔵）があります（以下、絵図と省略）・（写真1）。この絵図は、現足立区域東部と草加市瀬崎などの隣接自治体の一部描かれている縦一三二cm、横九九cmのかなり大きなものです。黄色で彩色された道路



写真1 全体像 ※地名等は加筆

や、寺社・村名・名主などが注記され、家や木などが描かれている場所もあります。今回は、この絵図についてご紹介します。

■道・橋 絵図の西（左）側には、幹線道路である奥州街道（日光道中）が描かれており、並行して道海道（とうけみち）が描かれています。道海道は、古い時代の奥州街道とも言われています。他にも村道や野道と記された道がたくさん描かれています。また、綾瀬川を挟んで二本の道が描かれており、写真ではわかりにくいですが、伊藤谷橋・榎木橋等が確認できます。他にも絵図のいたるところに

ろに橋が描かれています。これらにより、当時の区内の交通の様子を知ることが出来ます。

■寺社 この絵図で一番大きく描かれているのは花又の大鷲神社で、「鷲明神」と記されており、境内を示す線が引かれ、その線に沿って木が多数描かれています。本殿の場所を示すとみられる四角と鳥居の形が朱で描かれています。梅田の明王院にも山門が描かれています。他にも大谷田には「地藏」、竹塚には「大日勤化所」の注記があります。鳥居の形が描かれている場所や寺院名が記されている箇所は他にも複数あります。こうした寺社等は、ランドマークとなつたのでしよう。

■大名屋敷 絵図には、「真田小源太屋敷」・「佐竹大膳下屋敷」（写真2）と書かれた場所があります。

真田小源太は初代松代藩主となつた真田信之の子孫で、別家して二千



写真2 佐竹大膳下屋敷

石の大身旗本となっていました。小源太を名乗つたのは信之の曾孫の信方と信清の二人で、信清のとき罪があり、寛保二年（一七四二）に改易されました。真田小源太屋敷と記されている場所は、現在の保木間一丁目付近ですが、足立区域に真田屋敷の伝承等はなく、この絵図のみに記されている貴重な事実として大変注目されます。

つぎに「佐竹大膳下屋敷」ですが、こちらは六三一号で紹介した梅田の佐竹抱屋敷跡（現佐竹稲荷神社）のことで、秋田藩主佐竹氏の私邸です。五二〇〇坪の広大な土地に構堀（かまえばり）がめぐらされており、絵図にも構堀のようなものが描かれています。

■作成年代 大膳を名乗つた秋田藩主は四代義格（よしただ）しかいません。義格が大膳に任官したのは宝永五年（一七〇八）のことで、正徳五年（一七一五）には没してしまいます。したがって、この絵図はこの間に作成された可能性が高いと推測されます。

千住花又瀬崎辺之図は、一八世紀前半の足立区域内の様子を知ることが出来る大変貴重な文化財です。

【参考文献】

- 多田文夫「寄合旗本真田家の屋敷」『足立史談』五〇九号 平成二二年
- （文化財係学芸員 佐藤貴浩）